

第 22 回 日本抗加齢学会総会

P-066

大阪、2022/6/17-19

演題名：PCOS 症例の分娩予後に関する、単一施設 113 症例の検討

小宮慎之介 浅井淑子 岡田英孝 森本義晴

関西医科大学大学院 産科婦人科学講座

HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】多嚢胞性卵巣症候群 (poly-cystic ovary syndrome; PCOS) はさまざまな機序により排卵障害をきたす疾患であり、その詳細は不明な部分も多い。我々は、初診時に日本産科婦人科学会の PCOS 診断基準を満たした症例の不妊治療経過を追跡し、PCOS 症例を妊娠に導く条件の抽出を目的として、分娩に至った症例と至らなかった症例の患者背景や不妊治療経過を比較した。

【方法】2018 年 1 月から 12 月までの間に初診時に 127 症例が PCOS 診断基準を満たし、6 症例はがん妊孕性温存症例、8 症例は治療実績なし（継続受診なし、または自然妊娠）のため研究から除外された。一般不妊治療あるいは、初回採卵時の獲得胚を使い切るまでの累積分娩をメインアウトカムとした。

【結果】組み入れ対象の 113 名中、60 名が分娩に至り、53 名は分娩に至らなかった。分娩群で有意に母体年齢が低かった (32.72 vs 35.15 歳, $p = 0.004$) が、Day3 FSH 値、LH/FSH 比、AMH 値、BMI、既往妊娠回数、既往分娩回数、夫精子所見、不妊治療内容（タイミング指導、人工授精、IVF-ET）に有意差を認めなかった。IVF-ET に進んだ 84 症例中 45 症例 (IVF-p 群) が分娩に至った。IVF-p 群では非分娩群よりも有意に自然周期採卵が少なく ($p = 0.008$)、成熟卵子数、受精数、Day3 到達数は IVF-p 群で有意に多かった（それぞれ、 $p = 0.009$, <0.001 , 0.001 ）。PCOS は潜在的に OHSS のハイリスク症例であるため、約 90% の症例で凍結融解胚移植後、ホルモン補充周期で胚移植を行っており、胚移植スケジュールの選択には差を認めなかった ($p = 0.67$)。サブ解析として、児に関するアウトカムの検討及び、治療内容毎の生児獲得に至るまでの期間を評価するための Kaplan-Meier 推定を行った。

【結論】PCOS 症例はその病態から多くの胚が獲得される傾向にあり、高年齢でも採卵を継続する症例も珍しくないが、本検討より、PCOS でも、母体年齢と採卵数が分娩に関連することが示された。生児を獲得するためには、ovarian hyper stimulation syndrome: OHSS に注意しつつ、早期に効率の良い採卵を達成する必要がある。